



国衙・郡衙・古寺跡等  
遺跡詳細分布調査概要報告書Ⅱ

1990・3

宮崎県教育委員会

## 序

自然環境の破壊が問題となり、その現実は深刻なものとなってきております。人間を取り巻く環境の中で、自然環境と共に重要な要素が歴史的環境であり文化的環境であると思われます。ことに、文化財の保護・保存にたずさわる教育委員会の責務は、ますます重いものになっております。現在、実施しております本調査は、その意味で遺跡の保護・保存を目的とするものであります。

元年度事業では、国府推定地、国分寺、国分尼寺などが集中する西都市を重点的に分布調査及び試掘調査を実施してまいりました。国分寺での試掘調査では、思いのほかの成果もあり、これらの成果の積上げにより、本事業が実り多いものとなることを期待します。

1990年3月

宮崎県教育委員会

教育長 児玉郁夫

## 例　　言

1. 本書は、宮崎県教育委員会が国庫補助を受けて、平成元年度に実施した国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査の概要報告書である。
2. 今年度の分布調査は、西都市の国府推定地について重点的に実施し、試掘調査は、西都市国分寺跡及び大字三宅字尾筋の国府推定地について実施した。また、えびの市法光寺跡周辺についての分布調査もあわせて実施している。
3. 分布調査及び試掘調査は、第Ⅰ章に示す調査組織に基づき、石川悦雄・永友良典・日高孝治・北郷泰道が担当した。
4. 本書の執筆・編集には、北郷が当たった。
5. 分布調査及び試掘調査の採集遺物は、県総合博物館埋蔵文化財センターにおいて保管している。
6. 本書に用いた昭和36年日向国分寺跡発掘調査に関する写真は、小田富士雄先生が保管がされていたアルバムの中から採用したものである。写真記録は、乾板及び35mm、6×6版のフィルムが用いられており、この内乾板については埋蔵文化財センターにおいて保管されている。また、航空自衛隊新田原基地提供の航空写真があるが、これについてはネガの存在は現在のところ明らかでない。

## 本文目次

序	
例言	
第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査の経緯と組織	1
第2節 調査の概要	2
第Ⅱ章 分布調査の結果	2
第Ⅲ章 試掘調査の調査	4
第Ⅳ章 まとめ	6

## 挿図目次

第1図 西都市調査地周辺の地形及び布目瓦等出土分布地図	3
第2図 日向国分寺跡確認調査トレンチ設定図	5
第3図 日向国分寺跡5～7トレンチ遺構配置図	7
第4図 分布調査表採瓦実測図	9
第5図 日向国分寺跡確認調査出土遺物	10

## 表 目 次

表 1 遺物観察表(1)	8
表 2 遺物観察表(2)	8

## 図版目次

図版 1	西都市調査地周辺航空写真	11
図版 2	試掘調査地全景	12
	試掘調査地近景	12
図版 3	掘立柱建物跡南北柱列及び西側南北溝の状態	13
	南北柱列検出の状況	13
図版 4	掘立柱建物跡東妻柱穴の状態(南より)	14
	掘立柱建物跡東妻柱穴の状態(北より)	14
図版 5	掘立柱建物跡柱穴断面	15
図版 6	昭和36年発掘調査時日向国分寺跡航空写真	16
図版 7	日向国分寺跡全景(昭和36年)	17
	日向国分寺跡全景(平成2年)	17
図版 8	仁王坂周辺(昭和36年)	18
	仁王坂周辺(平成2年)	18

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査の経緯と組織

昭和63年度から国庫補助を受け、初年度は布目瓦出土地周辺の分布調査を中心に、日向國府関連の文献調査及び国分尼寺推定地の試掘調査を実施した。<sup>(1)</sup>

今年度は、調査指導委員会を下記のとおり組織し、平成元年7月10日～11日、平成2年2月6日～7日の2回委員会を開催し、調査の方法及び成果の評価について指導・助言を受けた。また、特別調査員として永山修一氏に文献を踏まえた国衙・郡衙の南九州での在り方にについて検討をいただいている。

調査については、国府推定地及び国分寺・国分尼寺推定地の集中する西都市大字右松から大字三宅を重点的に分布調査を実施した。ほか、えびの市法光寺跡周辺についても実施している。また、西都市国分寺跡、大字三宅字尾筋の国府推定地について寺域及び遺構の残存状態の確認を目的とし試掘調査を実施した。

### 調査主体

宮崎県教育委員会及び関係市町教育委員会

### 指導監督

河原 純之 文化庁記念物課主任文化財調査官

### 調査指導委員会

小田富士雄 福岡大学教授

山中 敏史 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター主任研究官

野口逸三郎 宮崎県文化財保護審議会会长

日高 正晴 西都市西都原古墳研究所所長・宮崎県文化財保護審議会委員

永井 哲雄 宮崎県県史編さん室長

阿萬 美水 宮崎県立宮崎北高等学校教諭

### 調査員

北郷 泰道 文化課埋蔵文化財係主任主事

石川 悅雄 宮崎県総合博物館学芸課主任主事

永友 良典 宮崎県総合博物館埋蔵文化財センター主任主事

日高 季治 宮崎県県史編さん室主事

蓑方 政幾 西都市西都原古墳研究所主事

木村 明史 佐土原町教育委員会社会教育課主事

特別調査員

永山 修一 鹿児島ラサール高等学校教諭

## 第2節 調査の概要

西都市の国府推定地及び国分寺（第1図5）・国分尼寺（第1図4）の所在する地域は、国指定特別史跡西都原古墳群の立地する標高50mの台地と中心市街地の広がる沖積地の間に位置する中間台地に集中している。国府推定地の内、幾つかの説は沖積地に当たる地区を上げるものがあるが、一つ瀬川の氾濫原との関係など地理的条件から、そして今回の分布調査の結果も否定的なものとなっている。

分布調査については、上記の中間台地を中心として、平成元年10月11日から12月18日の間、遺物の表採及び聞き取り調査を実施した。

試掘調査については、西都市国分寺跡を平成元年12月15日から平成2年3月23日の間、また尾筋の国府推定地を平成2年3月5日から3月23日の間実施した。

## 第Ⅱ章 分布調査の結果

分布調査に先立ち、中間台地の地形的特徴を捉えるための踏査を行った。

この中間台地は、西都原古墳群の北端から童子丸、石貫、法元、寺崎へとその面積を広げる。しかし、妻小学校から稚児池、さらに北上した児湯の池まで、現在水田として利用されている小さな谷が存在する。従って、稚児池の西の酒元から西都原古墳群の台地までの広がりは狭い。また、稚児池の東は都萬神社までで、その東は一段低く沖積地となる。

一方、西都原古墳群の南からの中間台地は、それほどの広がりを持たず推定地の地理的限界がある。また、小さな地区割りとしては、国分寺跡の南に東西に延びる谷地形が認められる（第1図4）。

分布調査の結果、古墳時代から古代にかけての遺物は、やはり法元から寺崎に一つの大きな集中がみられることが理解された。また、妻小学校の北側の地区の一角においては、布目瓦の出土のほか、地表下にボーリング棒などでも突きさすことの出来ない場所（第1図2）があるとの聞き取りがあり、築固められた版築の存在を思わせる場所がある。その他都萬神社周辺（第1図1）での布目瓦等の出土については、これまで知られているように認められ



第1図 西都市調査地周辺の地形及び布目瓦等出土分布地図  
(試掘地点 ○日向國分寺跡、□国府推定地)

ること以外には、新たな発見はなかった。

ただ、西都市教育委員会の進めていた市内遺跡発掘調査に伴う調査で、中間台地の南端に近い印鑑神社の周辺（第1図8）において垂木先瓦及び軒平瓦などの出土がみられ、新知見を得ることになった。

分布調査での布目瓦の確認は、やはり国分寺周辺で圧倒的に多く、国分寺寺域推定の西端に近い畠地（第1図6）で耕作によるダンボール箱一杯の採集品があった。試掘調査を隣接する空地に入れているが、それについては別章で触れる。また、寺域東境に近い地点（第1図7）において、焼き彫れ瓦になった平瓦が出土していることが確認された。

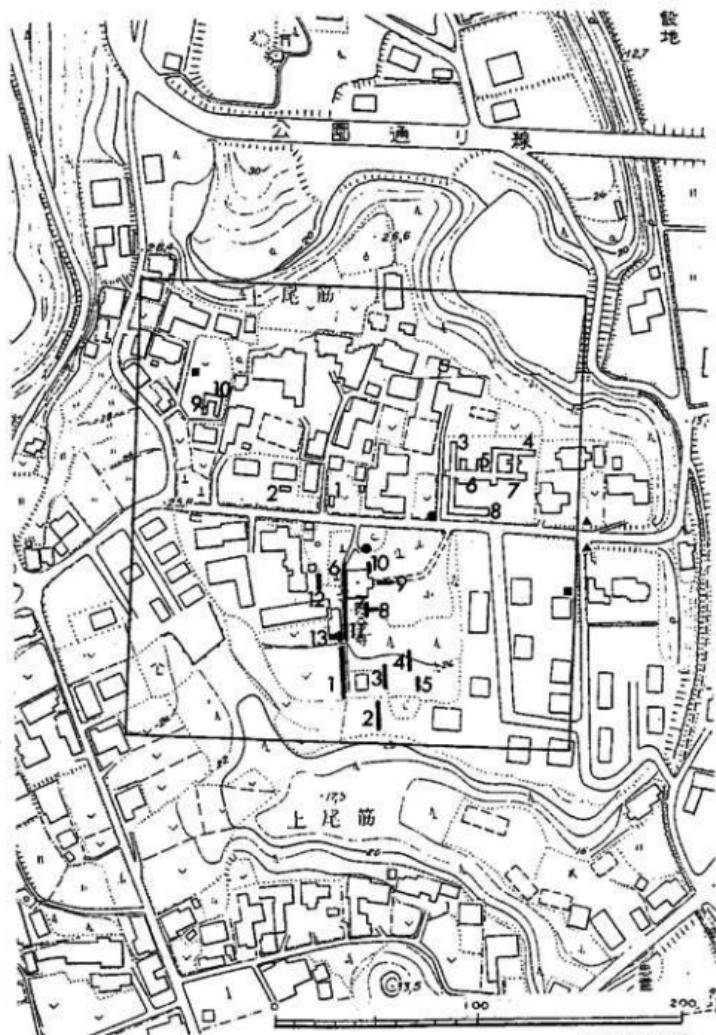
### 第三章 試掘調査の結果

日向国分寺跡については、昭和23年に駒井和愛を団長とする日向考古調査団が、また昭和36年には文化財保護委員会齊藤忠、九州大学教授鏡山猛らを招いて県教育委員会が確認調査を実施している。<sup>(3)</sup>さらに昭和47年には、寺域の東部分の宅地分譲造成工事に伴い緊急調査<sup>(4)</sup>が実施されているが、保護の処置を成す間もなく、劣悪な条件下で充分な調査は成されていない。<sup>(5)</sup>

昭和23年の調査地点については、充分な資料を現在のところ見い出さず明示できないが、昭和36年の調査地点を復元的に最近の地図上に乗せると、いわゆる五智堂を中心とした寺域推定範囲の南半分の中央部に集中して行われている（第2図）。また、当時確認されている礎石は、現在も幸いにして残されている。さらに、推定寺域中央を東西に走る道があるが、東から台地への坂は「仁王坂」と呼ばれており、古くは現在五智堂前に立つ仁王像がその坂の登り切った場所に在ったとされる。

昭和36年当時の写真と現在の写真（図版6～8）との比較からも歴然とするように、寺城内外の宅地化は著しく、畠地等の空地の確保も困難な状況に成りつつあるが、昭和36年の調査地と道路を挟む北半分においてやや広めの畠地が残されており、試掘調査は該当地を中心<sup>(6)</sup>に、周辺の可能地についての数箇所で実施した。

試掘の中心は、昭和36年調査地点の道路を挟んだ北側の唯一広く残された畠地で、6本のトレンチを設定して実施した。表土層約20cm、黒色土層約50cm、以下アカホヤ層となるが、遺物は黒色土層上層に包含されている。地元の人々の話によると古くから多量に瓦等が耕作の度に出土したと言うが、話題には遺物を検出することができなかった。すなわち、徐々に



第2図 日向国分寺跡確認調査トレント設定図

- 瓦出土地点
- 硫石
- ▲ 仁王像推定地点

耕作が包含層中に及び遺物の消失を進めた結果とみられる。しかし、幸い良好な状態で遺構は検出することが出来た。遺構の掘り込みは黒色土層の中程にあるが、明瞭な検出はアカホヤ層上面でなされた。遺構の中では、5~7トレンチで検出された柱掘形が $1.1 \times 0.7m$ 程の矩形の大きな柱穴で構成される東西棟の掘立柱建物跡の存在が注目された（第3図）。西側にさらに延びる可能性もあるが、南北溝との関係及び調査範囲の制約で確認できないが、東側は妻部分の柱穴が検出されており、すくなくとも桁行で5間以上、梁行2間の建物が想定される。また、北に半間程ずれた位置には、直径約0.5mの円形の柱穴が検出され、同じく東西棟で桁行5間以上、梁行3間の建物が想定される。

さらに、7トレンチの東端では幅2.2m程の南北に走る溝が検出され、またその内側約5.5mの位置で、同じく南北に並ぶ柱掘形が矩形の柱穴が検出されている。この柱穴は、並列し対応する柱穴列が、調査区内での確認の範囲では認められないことから、掘立柱建物跡のもとみるより、掘立柱塀の柱穴ともみられるが、一方では北に延びる柱穴が確認の範囲では認められていないことから、南北棟の掘立柱建物跡の可能性も残されている。

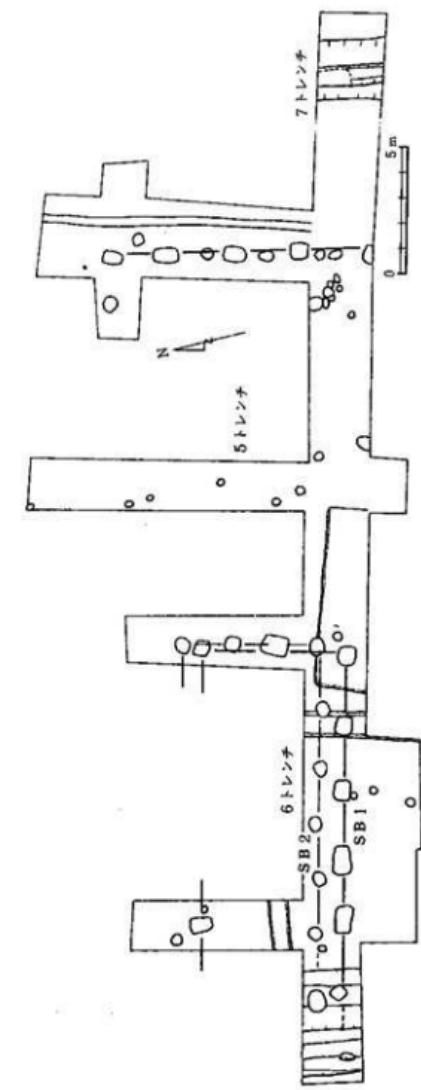
遺物は、軒丸瓦（第5図1）をはじめ布目瓦（第5図2~4）、土師質土器、須恵質土器の杯、皿類（第5図5~7）が出土しているほか、弥生土器片（第5図9）、縄文土器片も出土し、当地が古くから生活の遠地として利用されていたことをうかがわせる。検出された軒丸瓦は単弁蓮華文軒丸瓦で、布目瓦には格子目叩文もみられる。

一方、瓦溜りの存在を示すかのように、耕作によって瓦が多量に出土した畠地の隣接地にも9・10トレンチを設定したが、隣接地では瓦溜りの状態は検出されず、そのかわり完形品を含む土師質・須恵質の杯・皿類が比較的に集中して出土した。しかし、調査面積も狭少であったため遺構の状態を含む全体像を明らかにするには至っていない。

## 第IV章 まとめ

本詳細分布調査の大きな目的の一つは、国府の存在についてその対象地を絞り込むことがある。今年度の分布調査の成果は、沖積地に推定される国府の存在について否定的な結果を導きだしている。やはり、中間台地上にその対象地を求めることが妥当であろう。しかしその際、指導委員会においても指摘されるように国分寺（県指定史跡地）、国分尼寺（県立妻高等学校敷地）の比定地も含め、従来の説の根拠を改めて再検討し、整理していく必要は、より鮮明になってきたように思われる。また、西都市教育委員会の試掘調査により印鑑神社周

第3図 日向國分寺跡 5～7トレンチ遺構配置図



辺において垂木先瓦や軒平瓦が出土したことにより、古寺跡としての存在の可能性も含め、  
 (6)  
 木下 良説による国府の移動といった問題も浮上してきている。

一方、国分寺跡の試掘調査の成果は、検出された大規模な柱穴をもつ掘立柱東西棟建物は、僧房に当たるものとみられ、これまでほとんど造構の上から不明に近かった御藍配置につづく資料を提供することになった。これらの成果を基に、宅地化及び耕作による深耕の進む日向国分寺域内での史跡指定の在り方の検討も重要な課題となると思われる。

### 註

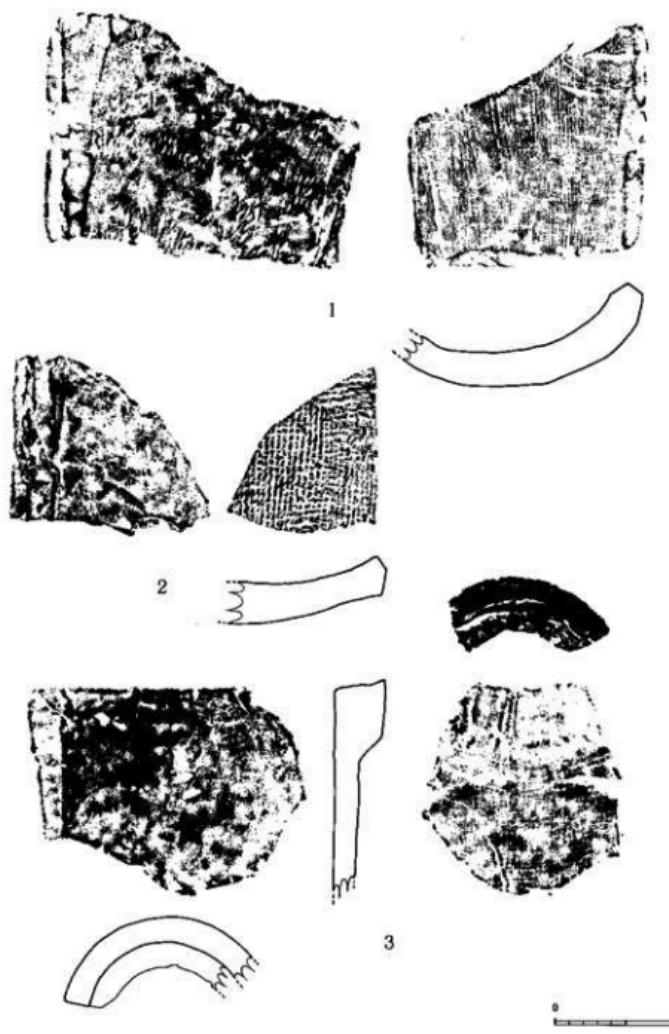
- (1) 宮崎県教育委員会『国衙・都衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査概要報告書Ⅰ』1989年
- (2) 国立歴史民俗博物館『共同研究 古代の国府の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第10集 1986年
- (3) 松本 昭「宮崎県日向国分寺」『日本考古学年報』1 日本考古学協会 1948年
- (4) 宮崎県教育委員会『日向国分寺跡』日向遺跡総合調査報告第3輯 1963年
- (5) 石川恒太郎「日向国分寺」『新修 国分寺の研究』第5巻下 西海道 1987年
- (6) 木下 良『国府 その変遷を主にして』1988年

表1 遺物観察表(1)

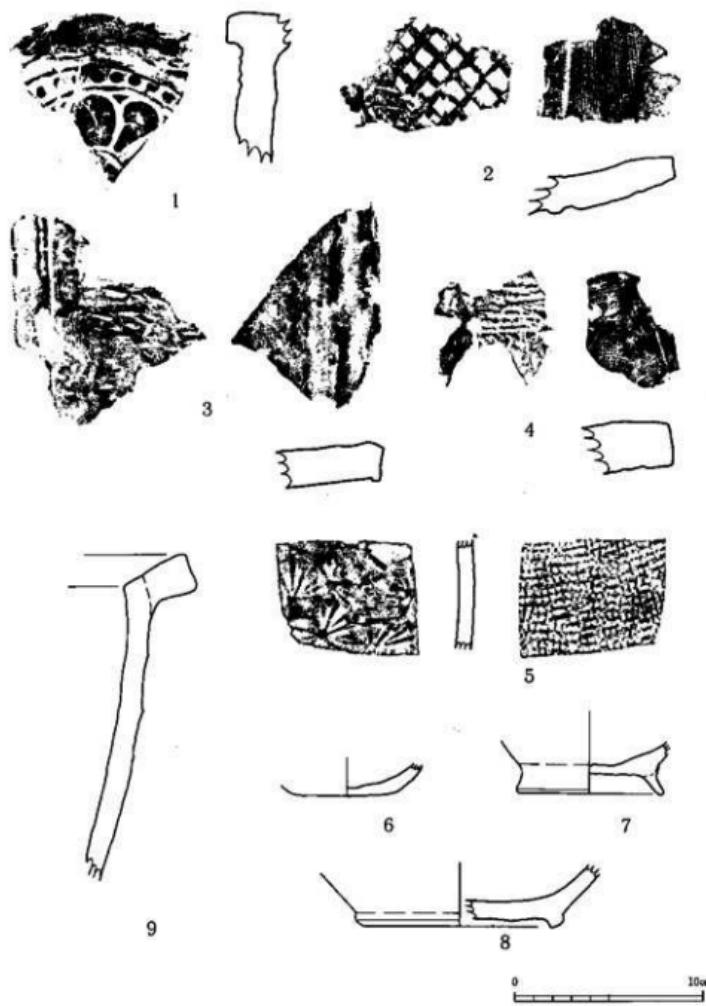
固番 番号	遺物 番号	遺構名	器種	器 形	文様および調整		焼成	色 調			胎 上	備 考
					外 面	内 面		外 面	内 面	外 面		
4	1		瓦		範田のあとナデ	布 目	良好	灰白(5 YR 5/1)	灰(5 YR 5/1)	0.5~3mmの灰色の砂粒を多く含む		
*	2		*		範田のあとナデ	繩 目	*	灰(5 YR 5/1)	灰(5 YR 5/1)	1~6mmの灰色の石粒を少量含む	表面に砂目付着	
*	3		*	*	ナ デ	布 目	*	浅黄焼(10Y R 5/1)	浅黄焼(10Y R 5/1)	きめの細かい茶色の砂粒を多く含む	表面の細かい茶色の砂粒を多く含む	

表2 遺物観察表(2)

固番 番号	遺物 番号	遺構名	器種	器 形	文様および調整		焼成	色 調			胎 上	備 考
					外 面	内 面		外 面	内 面	外 面		
5	1		軒丸 瓦		単糸織文		良好	灰オリーブ(5 YR 5/1)	灰オリーブ(5 YR 5/1)	1mm以下の灰・黒の砂粒を含む		
*	2		瓦		布 目	格子目たまき	*	灰(5 YR 5/1)	灰(5 YR 5/1)	1mm以下の黒い砂粒を多く含む		
*	3		*		布 目	繩 目	*	淡黄(2.5 YR 5/1)	灰(2.5 YR 5/1)	1mm以下の茶色の砂粒を多く含む		
*	4		*		布 目	繩 目	*	灰白(2.5 YR 5/1)	灰白(2.5 YR 5/1)	1mm以下の茶色の砂粒を多く含む		
*	5		茶 肩 備	茶子目 タタキ	単糸文タタキ		灰白(5 YR 5/1)	灰白(5 YR 5/1)	1mm以下の茶・灰・黒の砂粒を多く含む			
*	6		5号 底 備	ナ デ	ナ デ	*	浅黄焼(10Y R 5/1)	浅黄焼(10Y R 5/1)	1mm以下の茶・灰・黒の砂粒を多く含む			
*	7		*	*	ヨコナデ	ヨコナデ	*	褐(5 YR 5/1)	褐(5 YR 5/1)	1mm以下の茶・うす茶・黒の砂粒を多く含む	高台付	
*	8		底 備	輪 瓦	堅致	堅致	褐色モリーフ 粘土色調 (BROWN) (BROWN)	褐色モリーフ 粘土色調 (BROWN) (BROWN)	褐色モリーフ 粘土色調 (BROWN) (BROWN)	褐色モリーフ 粘土色調 (BROWN) (BROWN)	褐色	罐 器
*	9		口縁～ 胸部		単糸織文 タタキ ナ デ	単糸織文 タタキ ナ デ	良好	深褐色(BROWN) Cavendish	深褐色(BROWN) Cavendish	1mm以下の白・茶の粒を多く含む	外衛スヌ付 赤生土器	



第4図 分布調査表採瓦実測図



第5図 日向国分寺跡確認調査出土遺物

# 図 版

図版1

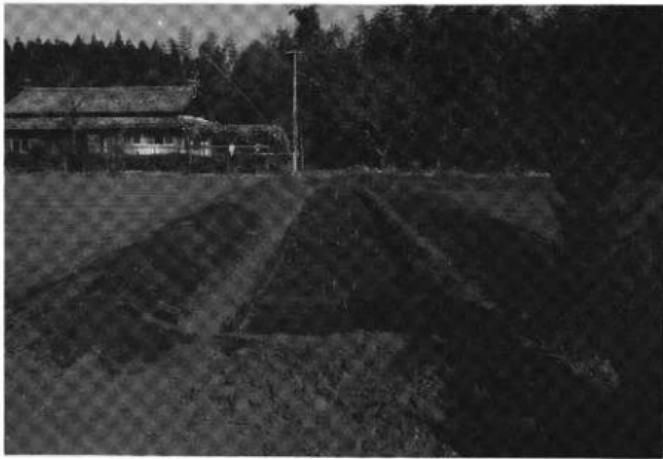


西都市調査地周辺航空写真

縮尺：約2万分の1



試掘調査地全景



試掘調査地近景(5トレンチ)

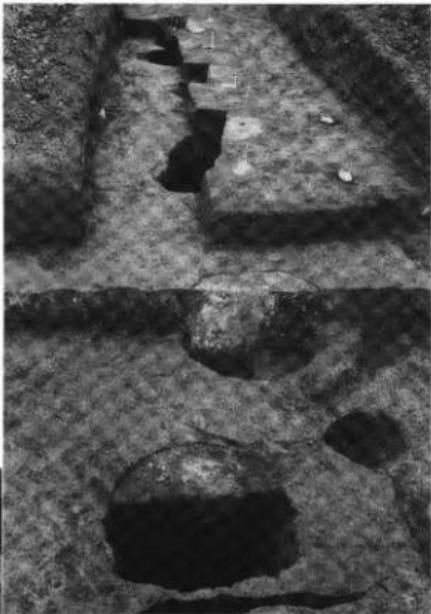
図版  
3

掘立柱建物跡南柱列  
及び西側南北溝の状態

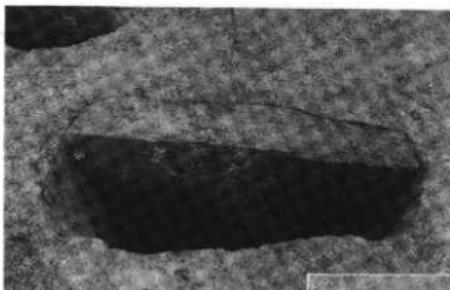


南北柱列検出の状況

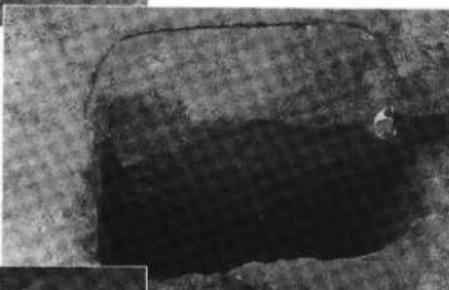
掘立柱建物跡東妻柱穴の状態  
(南より)



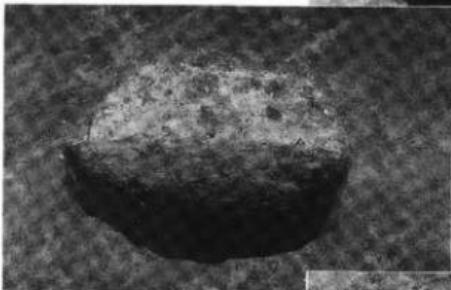
掘立柱建物跡東妻柱穴の状態  
(北より)



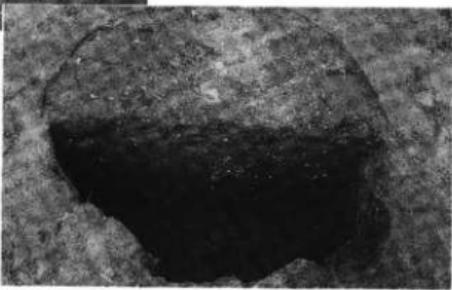
SB1 P.3



SB1 P.4



SB2 P.9



SB2 P.10

掘立柱建物跡柱穴断面

図版  
6



日向国分寺跡航空写真(南より) 航空自衛隊提供 昭和36年撮影



日向国分寺跡全景(西方丘陵上より)

昭和36年撮影



同 上

平成 2 年撮影



仁王坂周辺(西より)

昭和36年撮影



同 上

平成 2 年撮影

国衙・郡衙・古寺跡等  
遺跡詳細分布調査概要報告書Ⅱ

1990年3月

発行 宮崎県教育委員会  
編集 宮崎県教育庁文化課